

やんさノエ

会報

2012 No.18



発行 江差追分会

2012.11.26

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 0139-52-5555

FAX 0139-52-5544

ホームページアドレス <http://www.hokkaido-esashi.jp/>



江差北中生徒による尺八大連管

第五十回記念江差追分全国大会を振り返って

江差追分会会長 濱谷 一治

第五十回江差追分全国大会が好天の元、北海道知事を初め多くの関係者のご臨席を賜り、盛大に且つ肅々と終了したことに安堵すると共に、これまでご支援いただいた関係者、追分を愛唱し、見守っていただいた町民各位に深く感謝申し上げます。

へかもめのなく音に ふと目をさまし あれが蝦夷地の山かいな 江差の象徴である「かもめ島」を真つ赤に染める夕日に向かい、今年も多くの方が唄ってくれました。たくさんの追分愛好者が注目いただいた半世紀の大会を終え、改めて私の胸を去来する思いは、「遠い地から：海のない街から：そして地球の裏から：また予想もし得なかった震災に立ち向かっている地から：」と思うと言葉もありません。ただただ頭が下がる思いであります。

「何故追分に：」といつも思うことではありますが、これまで多くの追分研究者等の解説を総合するに、この二十七文字に秘められている歌詞、旋律には、人が生きてきた「生きざま」が表現されていると言っても過言でない心を揺さぶる唄ではないか：と言われています。

このように評価いただいている唄が当町に根付いたこと、そして唄い継がれてきたことを誇りに思っています。が、しかし、「追分」を愛し、口ずさんでいる方の中には、恵まれた環境の方ばかりではないことも忘れてはなりません。それでも「江差」に通い「追分」を口ずさみ「ひと時」でも自身の環境を忘れ、唄う姿は江差人として決して脳裏からは消えません。

これまで「追分」に携わってこられた多くの先人、先輩に敬意を表し、現在もこの唄に携わっている諸先生方に感謝し、これからこの唄を繋げていってくださるであろう明日を担う子供達に期待をし、五十回大会のテーマであった「感謝と創造」を肝に銘じ、江差町民はもとより、追分に携わっていただいている関係者挙げて後世に繋げる唄の継承に努力をお誓いいたします。

記念すべき五十回大会が多くの皆様からのご支援で終了させていただきましたことに改めて感謝申し上げます。

第五十回記念大会

江差追分日本一を競い五十年

多彩な事業展開で盛り上がる

関東地区初優勝

一般 杉本 武志さん
 熟年 木田 弘さん
 少年 東 美羽音さん

第五十回江差追分全国大会が九月二十一日から三日間、江差町文化会館で開催され、追分全国大会五十年の歴史を刻み、さらに百年に向け次世代に



継ぐ大会を目指して盛大に行われた。

江差町は、第五十回記念大会を『江差追分年』として「感謝と創造」をテーマに町を挙げて、昨年から数々のイベントを展開して大会を迎えた。

本年五月から、江差追分が北前船によって運ばれたゆかりの寄港地に、追分訪問して交流を図り、小中学校では追分教育を始め、江差北中学校は六十人全員が二年前から追分尺八を習得、舞台合奏出演に取り組んできた。

四月には「みんなで考えよう江差追分の未来を」をテーマにシンポジウムを開催、これからの課題も探求した。

大会開催に先立ち九月二日には、江差混声合唱団リンデンコールに函館、札幌アカデミー合唱団が協賛して「いにしえ・祈りコンサート」が開催され、合唱コンサートに「組曲江差追分」を

組み入れ大会の先がけを飾った。また、大会前夜祭には、全国の参加者を歓迎、郷土芸能「江差餅つき囃子」で捣きあげた餅まきが披露され、盆踊りもにぎやかに行われた。
 今大会は、例年のない盛り上がりで、大会アトラクションも多彩に舞台を飾った。

大会優勝は

大会出場者は一般部門百九十五人、熟年部門(六十九歳以上)百四十三人、少年部門八十二人で、各部門の優勝を競い合った。

今回の一般部門優勝は、東京都文京区の杉本武志さん(三十八歳)熟年部門は札幌市の木田弘さん(六十九歳)、少年部門は札幌市の東美羽音さん(九歳)が優勝の栄冠を手にした。

一般部門で追分日本一に輝いた杉本武志さんは、東京都文京区ですし店を経営、関東地区で初の優勝。本州では岩手、秋田に次いで四人目。江差地方厚沢部町の出身で、第十八回大会優勝沢口一雄さんの長男。半世紀にわたる大会で親子二代初の優勝で話題を呼んだ。

「故郷を離れて江差追分の魅力を知

って取り組んだ。父と並ぶ優勝を手にして誇りに思う」と喜びを語った。

海外からの出場は、ブラジル支部の海藤司さん(六十五歳)、娘の紀世シンチアさん(二十七歳)、ハワイ支部のエルシーカワモトさん(七十六歳)の三人。

大会三日間のアトラクションでは、町民百六十人、全国支部長の追分大合唱、中学生六十人の尺八合奏、全国十一地方の追分節競演などが上演されて人気を呼んだ。

一般部門入賞者

- 優勝 杉本 武志(東京都)
- 準優勝 川俣 明彦(東京都)
- 第三位 黒森このみ(札幌市)
- 第四位 三浦 麻衣(大阪市)
- 第五位 柿沼 初雄(宇都宮市)
- 第六位 佐藤美枝子(札幌市)
- 第七位 山本 康子(江差町)
- 第八位 佐竹 春敏(浦臼町)
- 第九位 中田 桂敏(盛岡市)
- 第十位 村川真奈美(苫小牧市)

審査員特別賞

海藤 司、海藤紀世シンチア(ブラジル)

第50回記念江差追分全国大会で優勝



九月二十九日
北海道新聞朝刊掲載

「栄武」を切り盛りする多妻キヨミさんとすし店(山田一輝)

優勝旗を手にした瞬間、応援してくれた人たちの顔が頭の中を駆けめぐり、涙があふれた。檜山管内江差町で23日に開かれた全国大会の決勝会。「家族、師匠、故郷の皆さんに恩返しできた」と声を振り絞った。隣町の厚沢部町出身で東京都文京区在住。父の沢口一雄さん(68)は第18回大会の優勝者で、父の唄を聴いて育った。江差高を卒業後、すし職人を目指して上京。縁遠くなった江差追分の魅力をあためて感じたのは、10年ほど前、いとこで29回大会の優勝者木村香澄さんが東京で開いたステーキ。懐かしい旋律に「忘れてかけていた故郷への思いがよみがえった」。

昨年大会で2位に入り、今大会では優勝候補としてのプレッシャーを感じていたが、「無心でうたえたい」。厚沢部町の住民の応援も心強かった。半世紀に及ぶ全国大会で親子優勝は初めて。「父と同じ場所に立てたことを誇りに思う」。店では客の依頼があれば、追分を披露し、キヨミさんが司会役をして盛り上げる。「これからは夫婦で日本一のすし店を目指すと笑う。38歳。

杉本 武志さん

忙な日々。仕込み中が貴重な練習時間だ。体に染み付いた唄を取り戻すのに時間はかからず、稽古を始めて3年目の2005年、全国大会に初出場。喜びを帯びた声に磨きをかけ、実績を積み重ねてきた。

熟年部門入賞者

優勝 木田 弘(札幌市)



(昭和五十三年より山谷隆声師に師事。札幌民謡連盟優秀歌手選抜決勝大会江差追分熟年の部優勝、全道熟年者民謡決勝大会準優勝、札幌東白石支部所属)

審査員特別賞

- 準優勝 佐藤 修三(八郎潟町)
- 第三位 本田 勝三(函館市)
- 第四位 飯尾 利雄(洞爺湖町)
- 第五位 石黒 長雄(留萌市)
- 第六位 鈴木 弘(音更町)
- 第七位 植田 征克(深川市)
- 第八位 藤本 哲(倶知安町)
- 第九位 菅井 妙子(小樽市)
- 第十位 細木 利良(音更町)

エルシーカワモト(ハワイ)

少年部門入賞者

優勝 東 美羽音(札幌市)



(平成十九年坪田昭信師に師事。道南口説全国大会幼年の部優勝、少年一部優勝、民謡民部少年少女全国大会準優勝、乙部陽翔会所属)

審査員特別賞

- 準優勝 今井柚唯子(堺市)
- 第三位 田村つくし(江差町)
- 第四位 竹野 留里(室蘭市)
- 第五位 高橋 稜(江差町)
- 第六位 前川みどり(江差町)
- 第七位 西口真由奈(大和郡山市)
- 第八位 鈴木 清か(みよし市)
- 第九位 田中 菜々(江差町)
- 第十位 小山田祐輝(札幌市)

- 石田 桃子(札幌市)
- 小笠原 茜(江差町)
- 浅尾 強嗣(千歳市)
- 小林 成美(石狩市)
- 高橋 航(江差町)

『えさしグルメまつり』で三平汁提供 上町商店街

「江差追分年」では、今年春から数々の行事を繰り広げてきた。ヒバの記念植樹、新しい追分歌詞公募、追分企画展から江差追分五十年の歴史写真展も町内数か所で展示した。

商店街では『えさしグルメまつり』を大会期間中開催、全国からの来訪者に地元の三平汁を提供、各地方の唄自慢には地方民謡を披露してもらうなど交流も行った。このように大会会場外でも町をあげて盛り上げた。



民謡などで盛り上がったグルメまつり

観戦エッセー・第五十回記念江差追分全国大会

親子二代・稀代の江差追分チャンピオン 思い出す三十二年前の映画・寅次郎かもめ歌

学芸部門理事 高田 裕



沢口 一雄 さん



杉本 武志 さん

第五十回江差追分全国大会は様々な記念アトラクションと共に、いつものごとく二日間の予選会と決勝会で多くの感動を与えてくれた。ある程度は予測できるものの、今年の優勝者は誰なのか、過去にあったように果たしてダークホースが出るのか興味はつきない。

へかアもオめエー、まずは出だしの「か」の入り具合はどうなのか、それから二声上げのし、三六の落とし、五節の高み、そして止めの状態や唄の情緒と味わいなど、いつも固唾を呑んで聞きいつてしまう。

注目すべきは、昨年の準優勝者・杉本武志さんだった。予選会の二日

目に最後から二番目に登場し、観客に万雷の拍手をもらおう。みなさん、よく知っているようだ。当然のことながら、五十名の決勝会には十四番目に登場したが、常連が多くどなたが優勝してもおかしくない雰囲気緊張感が走る。結果は下馬評どおり、東京菊水会の杉本武志さんだった。実は、彼は江差町の隣町、厚沢部町生まれで、父親は第十八回大会で優勝した沢口一雄さん、彼もまた前年度の準優勝者で、親子二代同じ轍を踏んだ稀代の江差追分チャンピオンになり、今回の快挙となった。いつの日か、親子お二人の江差追分掛け合いを聴いてみたい。

一九八〇年当時の大会は山の上にある江差文化センター体育館で二日間の開催だったが、三十二年前を振り返ると、観客はもとより出場者も今以上に熱気と興奮があったような気がする。

そんな噂をもとに山田洋二映画監督は「男はつらいよ・寅次郎かもめ歌」を制作した。ご存知のとおり、同シリーズは寅さん（渥美清）が全国の田舎町をテキヤ行脚しながら、その

映画ポスター



土地で出逢うエピソードと故郷・葛飾柴又を結ぶ人情味溢れる物語で、昭和五十五年十二月二十七日封切りの正月用作品であった。

この本編の導入部で、第十八回江差追分全国大会の幟や横断幕が飾ら

記念の大会に 高橋はるみ北海道知事が出席

第50回記念江差追分全国大会の名誉大会長である、高橋はるみ北海道知事が23日の決勝会開会式に出席。高橋知事が大会に出席するのは4年前の第46回大会以来2回目となります。

高橋知事は祝辞で「江差追分は大変難しい。この難しい民謡であることが、全国的にも世界からも注目をあび、日本一の大会の地位を得られたのではないかと思う。これから60年、70年とさらにこの大会が発展するよう私自身もいろんな形でご支援させていただくことを誓います」と江差追分に今後も北海道として支援を約束していただきました。



れたノド自慢風の特設舞台から江差追分の調べが流れる。司会者が紹介する出場者のお名前には、松村守治さん（新栄町）や柳田テツ子さん（茂尻町）がアナウンスされ、若き青坂満師匠がアップで江差追分を唄う。また、奥尻島出身の亡き友人の娘でマドンナ役のすみれ（伊藤蘭）と寅さんは、柴又の「とらや」の茶の間で、へかアもオめエーと唱和する姿が微笑ましい。

この昭和の名作は、定時制高校がモチーフなのだが、バックボーンは江差追分であり、平成時代になってこの映画は江差・奥尻両町の財産であり宝になった、と思っっている。

多くの人間ドラマが生まれた 第五十回記念大会

学芸部門理事 館 和夫

追分ファン待望の第五十回記念江差追分全国大会と、十六回目を迎えた熟年・少年の江差追分全国大会が、去る九月二十一日から三日間、江差町文化会館で開催され、盛況のうち

に終了した。各種の記録や報道も参考に関係行事も含めて一連の流れをたどり、若干の感想も併わせ記してみた。

での報告法要も、例年のとおり滞りなく行われて、大会の成功を祈願する参加者九十人の江差追分が献唱された。

引き続き同日の夕方には追分会館裏の特設ステージで前夜祭が行われ、餅つきばやしなどの郷土芸能が披露されたほか、二百名を超える内外の来客に三平汁やイモの塩煮などが振る舞われた。折から追分会館のほか三か所において「江差追分五十年の歴史写真展」、企画展「江差追分―その伝承者たち―」（於・郡役所）が

開かれており、前景がいやが上にも高まる中で江差町は、全国大会の開会以来半世紀という大きな節目を迎えたわけである。

九月二十一日午前八時半開場。濱谷一治大会長の開会あいさつの後、本大会出場選手中最高齢の中田セツさん（九十三歳・七飯町）を皮切りに予選会が始まった。熟年六六名、一般九七名、合計一六三名の選手が出場し、日頃の練習の成否をかけて夜の八時頃まで熱戦を繰り広げた。その後はアトラクションに入り、舞台

の歌謡ショーで、初日は幕となった。予選会の二日目には、東日本大震災の被災地である岩手県山田町からの出場者など注目された唄い手を含む熟年七七名、一般九八名、合計一七五名の選手が出演した。昼近くに行われたアトラクションには、日頃から追分に親しんでいる全国の少年少女百人による大合唱が披露され、追分界の未来を象徴するその元氣な歌声に、会場から惜しめない拍手が贈られた。

この日の午後、本町方面の商店街で開かれていた「えさしグルメまつり」に知人を誘って参加してみた。路上いっばいに椅子やテーブルを並べ、周辺の商店から焼き鳥や汁物、ビールなどを廉価で提供し、福引の札を



佐之市法要



前夜祭



歴史写真展



金田たつえ歌謡ショー



少年少女による江差追分大合唱

配り、木村香澄さんら若手のアーティストの生演奏を聴かせながら大会参加者や観光客と町民の交流を図ろうという試みである。地元の人々の溢れんばかりの好意と細やかな心遣いを感じながら、半時ばかり楽しい時間を過ごしたあと、大会場に戻った。

その夜のアトラクションとして、まず行われたのは全国から集った江差追分会支部長による追分の大合唱である。次いで用意されたのは、江差追分のほか、本州各地に伝わる追分節、すなわち追分馬子唄、信濃追分、小諸馬子唄、出雲追分、初瀬追分、越後追分、小千谷道中追分、馬糞追分、本荘追分、秋田追分、以上の十曲による「全国追分節大競演」であった。上記の内、江差追分会の渋谷上席師匠が唄った越後追分を唯一の例外として、他は皆それぞれの唄の地元を代表する唄い手による競演である。いずれも日頃、めったに生で聴くことのできない本場の名調子であったが、中でも私にとって珍しく印象深い名唄と思われたのは能登の馬糞追分であった。

大会三日目は、午前八時からの開演で、この日は、まず五歳から中学三年までの少年少女八十二名が出場する第十六回少年全国大会、熟年の部二十五名が出場する決選会が行わ

れた。次いで行われた決選会の開会式は、会長挨拶と表彰式などのセレモニーをはさんで、一般の部決選、すなわち大会のハイライトの場面である。一般の部の予選通過者五十名の精魂を傾けた演唱が終わったのは、夜の七時過ぎであった。審査を待つ間のアトラクションは、例年のとおり前年の各部門の優勝者の唄で、それに加えこのたびは特別に第一回から十五回大会までに優勝を果たした四組の歴代優勝者による掛け合いの江差追分や、最優秀賞を獲得した新作歌詞による追分が披露された。



全国の支部長による江差追分大合唱

一方、この間に審査員を代表して佐藤愛彦審査室長が一般の部の講評を取りまとめたが、その結果は出場者は勿論、一般の愛好者にとっても大変参考になる指摘と思われるので、次にその概略を記してみよう。○本州各地からの出場者の実力の向上が大変目覚ましい。○初めてブラジルからの出場者が、決選会に進出したのは本大会上の歴史的な快挙。○上位入賞者の唄は、味わい深く感情のこもったものであった。中でも若い女性の躍進が目立っており、将来の活躍に大いに希望が持てる。○課題としては、唄が長くスローペースになっているので、もみを小さく、早い運びにすることが必要。○二声上げのしは平らに引くのではなく、中間にうねりの谷が来るように引くことが大切。○のしの途中でオーからエーというように発音に変化する人がいるが、変えない方がよい。

さて、一同待望の審査結果は、一般の部の決勝進出者五十名の中から東京都文京区ですし店を営む杉本武志氏（厚沢部町出身、三八歳）が優勝、念願の栄冠を勝ち得た。氏は第十八回大会優勝者の沢口一雄準師匠の子息で、大会史上初の親子優勝という快挙を成し遂げたわけである。杉本氏はまた、第二十九回優勝者の木村香澄さ

んの従弟にも当たっており、事情を知る地元の人々は、「さすがは声のマキ（声よしの家系）」という実感を深くしたことであろう。一方、第十六回熟年江差追分全国大会の決選進出者二十五名中、優勝の栄に輝いたのは、札幌市の木田弘氏（六九歳）であった。同じく十六回に及ぶ少年大会を制したのも同市の東美羽音ちゃん（小三）で、それぞれに日頃のたゆまぬ努力が実った結果であった。ともあれ審査発表のあと各部門の優勝者が優勝旗を持ったまま万感を込めて唄う江差追分は、いつもながら感動的であった。

以上、毎年繰り返される情景であるが、今年もまたこの一曲を縁として、数多くの人間ドラマが生まれ、栄光と失意と、悲喜こもごもの物語が形作られたことであろう。落葉のように降り積もるそのような人間の情念が、土となり肥料となって常に次代の文化を生み出す。追分という道に出会ったことを感謝しながら新たな明日を目指す。まさに「感謝と創造」という本大会のテーマに掲げられた言葉に一致しているではないか。私は川の流れに面して古人が懐いたようなある種の名状しがたい感慨を胸に、今年もまた追分大会の会場を後にした。

江差追分新歌詞募集 最優秀賞は東京都の松山さんに —新作歌詞の募集結果と留意点—

事務局では昨年の十二月から今年の六月まで、江差追分の新歌詞を募集しました。一五五点の応募があり、予め追分会から委嘱した六名の審査員により、七月十五日に追分会館で厳正な審査が行われた結果、松山絃子さん（東京都世田谷区）の作品が最優秀賞に決定しました。

しかし、驚いたことにご本人は、投稿後、結果の発表を待たずに他界されてしまいました。誠に痛恨の極みであり、心からご冥福をお祈り申し上げます。

ほか二点の優秀賞は、千葉栄人氏（岩手県盛岡市）、森真紀子さん（札幌市）の両氏に贈られ、また、三点の佳作には、辻井 修氏（滋賀県大津市）、森田成子さん（大阪市）、森茂之氏（兵庫県尼崎市）の作品が選定されました。（最優秀作品は後掲のとおり）

応募作品の多くは、江差地方の風土をイメージした北海情緒を盛り込んだり、時事的な題材を扱ったりし

た熱意のこもった力作でした。一首単位でみると捨てがたい佳句も多かったのですが、前唄の後半を欠いて三句しかなかったり、いささか無理な当て字や漢字の読ませ方をして唄いにくいため選に漏れた作品もありました。

今後は読みやすく唄いやすい平易な表現で広く現代の生活感情を盛り込み、北海の地独特の風土感も兼ね備えた作品が現れることを期待します。

【最優秀賞】

東京都世田谷区 松山 絃子

（前唄）

潮の香りに
はまなす揺れて ヤンサノエ

寄せるさざ波 瓶子岩

島の向こうの 大海原はネー
砕け散る波 日本海

（本唄）

尺八の音 聞くたび 思いは江差
心乱れて 目に涙

（後唄）

はぐれ鴉が あかねの空にネ
鳴けばひかれる 後髪

今年1年様々な形（民間業者・団体協力等含む）で 50回記念大会及び江差追分をPRしました



○東北チャリティーイベント
(6/23.24 札幌市において追分ステージを4回開催)



○北前船寄港地訪問第2弾
(7/26～28 秋田県能代市、秋田市、石川県珠洲市へ追分を届ける)



○JR車内中吊りポスター
(8/24～29まで札幌管内JR車輻に中吊り広告を掲出しPR)



○オリジナルフレーム切手作成
(町内郵便局において大会を記念したフレーム切手を作成)



○いにしえ祈りコンサート
(9/2 札幌、函館、江差の合唱団によるコンサートへ追分の唄い手や少年合唱が出演)



○競馬のレース名に
(9/5 ホッカイドウ競馬のレース名に「江差追分全国大会賞」と冠をつけ、競馬ファンにアピール)

江差追分会

「伝統文化ポラ賞」地域賞を受賞 （大会五十年の節目の年に）

日本の貴重な伝統文化に貢献され、今後も活躍が期待できる個人または団体に對し、更なる活躍と業績の向上を奨励することを目的に贈られる第三十二回「伝統文化ポラ賞」地域賞（公益財団法人ポラ伝統文化振興財団）五件のうちの一つに江差追分会が選出され、十月十日東京都において贈呈式が行われ、濱谷会長に表彰状と記念品が贈呈されました。また、副賞として五十万円を受領しました。

選考理由は、江差追分会結成以来、枝分かれしていた節を整え、曲譜を作り、各人が切磋琢磨して唄を磨き、多くの名人を輩出して、人々を魅了する名曲に育て上げた。昭和三十八年に江差追分全国大会を開催し、以後参加者が年々増加し、優れた歌い手が次々に誕生、世界に知られる我が国を代表する歌曲に成長した。本年はその大会が五十周年を迎え、新たな発展を期する時、江差追分会が北海道を拠点に歌謡史上に果たした功績が認められたものです。

受賞された濱谷会長は、「この江差追

分という唄を江差の地にもたらした先人、先輩に感謝し、愛好者、町民、この賞を授けていただいた皆様方にもお礼申し上げます」と受賞の言葉を述べました。



記念品を受けとる濱谷会長

事務局からのお知らせ

江差追分セミナーの開催

二月に次の日程で開催します。

【第二十八期江差追分セミナー】

- 一月三十一日(木) ～ 二月二日(土)
 - 二月 七日(木) ～ 九日(土)
 - 二月 十四日(木) ～ 十六日(土)
 - 二月二十一日(木) ～ 二十三日(土)
- いずれも時間は九時～十七時まで

※受講料は、お一人様三日間コース 一万五千元となりますが、二週以上受講される方につきましては、二週目以降受講料は一万円と割引になります。

冬季師匠会研修会の開催

今年度も唄の指導方法並びに伴奏の技能向上を図ることを目的に、第二回目的師匠会研修会を次のとおり開催します。

・ 日程 二月十七日(日)

午前十時三十分～午後三時

※師匠会総会後に開催します

・ 会場 ホテルニューえさし

資格認定審査会の開催

今年度の資格認定審査会については、十二月に地区運営協議会を通じて周知しますので、申請は地区運営協議会を経由して三月一日までに申請して下さい。

なお、日程等については、次のとおりとなります。

・ 日程 平成二十五年三月十七日(日)

午前九時～

・ 会場 江差追分会館

・ 認定区分 師匠・準師匠・講師・準講師
**平成二十五年江差追分会
理事会・総会**

・ 日程 平成二十五年四月二十八日(日)

理事会 午後一時

総会 午後三時

・ 会場 ホテルニューえさし



秋季江差追分セミナーより

各支部・地区運営協議会からの情報をお待ちしております。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 江差追分会事務局